

美しき夜のはじめの破蓮

藤田湘子

掲句の「美しき」はどこにかかるのだろう。夜、夜のはじめ、破蓮と順に追って考えてゆくと、そのどれをも修飾しているように思えた。それぞれの言葉が相互に作用して、「夜のはじめの破蓮」の持つ気分そのものが美しきものであると感じた。

秋も深まった頃、京都の寺院で夕暮れの蓮池に出くわした事がある。まだ枯蓮とは言えない破れかかった葉が風に吹かれ、葉を落とした茎は突っ立っていた。眺めているうちに、少しの水面に映る夕空の青さがきらきらと光る様子や、破れつつも真っ青な大きな蓮の葉が広がる景色は、はやる心を静めてくれる何時までも佇んでいた場所となった。

1977年（552作）第五句集『春祭』 鑑賞・野本京